

- 平成27年に県の**促成イチゴ新品種「ゆうべに」**が開発され、生産現場に導入が始った。
- このため、農業革新支援センターでは、関係機関と連携して**栽培マニュアル**等を作成するとともに、県内の**技術指導員を養成し、新品種の栽培指導体制の強化**を図った。
- その結果、**新品種「ゆうべに」の導入面積が順調に拡大し、県全体のイチゴ平均反収が向上**した。

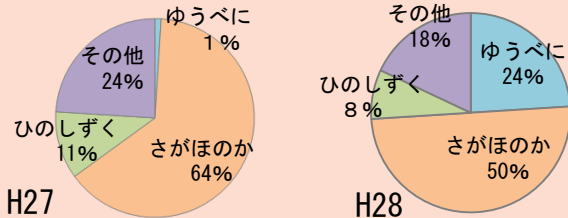
具体的な成果

普及指導員の活動

1 **新品種「ゆうべに」の導入面積が拡大**

■ 品種特性（早生性・収量性）の技術理解が進み、栽培面積が急増（H26→H28）

- ① **栽培面積**
0ha → 45.1ha
- ② **生産者数**
0名 → 288名
- ③ **面積シェア**
0% → 24%



2 **栽培技術確立による単収向上**

■ 「ゆうべに」の安定生産技術の確立により、既存の主力品種より年内収量が向上

「ゆうべに」の年内収量
 H27: 1,284kg/10a (255%増)
 H28: 830kg/10a (242%増)

※()内は主力品種との対比

■ 県全体のイチゴの平均反収も増収傾向（H26→H28）

3.4t/10a → 3.7t/10

3 **天敵利用による難防除害虫（ハダニ）の対策**

■ 実証ほを設置し、優良事例調査と技術確立の支援を図り、被害の低減につなげた。

天敵による防除効果に満足した農家の割合→97% ※玉名横島地区のアンケート（108戸回答）

平成27年～28年

- 「ゆうべに」の**実証ほ調査**と技術指導を支援。
- 試験研究成果や現地の優良事例を基に「**ゆうべに栽培管理指針**」を作成。

平成26～28年

- 関係機関と目標や課題を共有するため、**いちご振興プロジェクト**に参画。
- **技術指導員（普及指導員、JA営農指導員）の連携強化と技術向上**を目的に、技術部会（年6～8回）を実施。



平成28年

- **ICT技術**を活用した栽培技術等の情報共有システムの検討を実施し、指導体制の強化を支援。

普及指導員だからできたこと

・ 専門技術を持ち、試験研究機関等の情報や知る普及指導員だからこそ、**地域の気象条件に応じた栽培方法を定着させることが可能**。

・ 先進農業者、JA、試験研究機関、行政との連携を日頃から行っており、**生産課題への対応や産地拡大ができた**。

熊本県

優良事例のモデル化による促成イチゴの単収向上

活動期間：平成26～28年度

1. 取組の背景

平成27年に促成イチゴ品種「ゆうべに」が開発され、生産現場に本格的に導入が始った。「ゆうべに」は、早生性や高い収量性を有するのが特徴で、早急な技術確立と普及定着が求められている。

また、難防除害虫（ハダニ）についても、天敵を利用した効率的な防除技術の確立が求められている。

2. 活動内容

(1) 実証ほ調査と技術指導支援

各地域に設置した実証ほ（新品種「ゆうべに」、ハダニ天敵利用）について、調査と技術指導の支援を行い、技術確立と普及推進を図った。

(2) いちご振興プロジェクトへの参画

関係機関（行政、試験研究機関、JA熊本経済連、JA熊本中央会・連合会）と生産や販売課題を共有し、振興方針について検討を行った。

(3) 技術部会の開催支援

技術指導員（普及指導員、JA営農指導員）の連携強化と技術向上を目的に、検討会議を開催した。特に、新品種の栽培ポイントごとに、年6～8回の技術検討を行った。

(4) ICT技術を活用した情報共有システムの検討

各地域の栽培状況や技術情報を共有・伝達するため、タブレット端末を活用した情報共有システムの検討を行った。

3. 具体的な成果

(1) 栽培面積の増加

品種特性の技術理解が進み、生産現場で栽培面積が45haまで増加した。

(2) 栽培技術確立による単収向上

試験研究結果や現地の優良事例を基に、「ゆうべに栽培管理指針」を作成し、技術指導に活用した。

年内収量は、830～1284 kg/10aとなり、既存品種より収量が得られた（242～255%増）。また、栽培面積の増加により、県全体のイチゴ平均収量も向上した（3.4t/10a→3.7t/10a）。

(3) 天敵利用

実証ほを設置し、優良事例調査と技術確立を図った。大規模実証をした地区のアンケートでは、取り組み農家の98%でハダニの防除効果に満足が得られている。



「ゆうべに」栽培・出荷の様子

4. 農家等からの評価・コメント（JA たまな園芸専門部イチゴ部長）

「ゆうべに」の能力の高さを実感しました。マニュアル通りに管理すれば、大果で年内にかなり収穫できています。IPM 技術と併せて集約的な管理を行えば、経営的に有利な品種であると感じています。今後は、着色不良果など障害果の出ない技術確立に期待しています。

5. 普及指導員のコメント（熊本県県北広域本部玉名地域振興局農業普及・振興課 鶴田 伸二）

玉名地域では、「ゆうべに」の栽培面積が 32.9ha まで拡大し、共販面積の半分以上を占めるまでになりました。

生産現場では、品種の特性を理解する栽培講習会を実施するとともに、栽培マニュアルに沿った指導を行いました。特に H28 は面積が急激に増えましたが、概ね目標どおりの成果が得られ、イチゴ生産者の所得向上につながっています。

今後も栽培面積・戸数が増加する予定ですので、関係機関と連携して新規生産者を中心に技術普及を図っていきたいと考えています。

6. 現状・今後の展開等

栽培面積が増加傾向にあり、次年度も新規生産者が増加する予定である。安定生産には、品種特性の理解が必要であるため、ICT 技術を活用した効果的な情報伝達・共有による集団指導体制の強化を図る。